

第一コリント5章5節 についての一考察

— 終末論的霊肉二元論の観点から —

A Study of 1 Corinthians 5:5 in Light of the Eschatological Dualism of Spirit and Flesh

村山 盛葦

Moriyoshi Murayama

キーワード

終末論、霊肉二元論、サタン、倫理勧告、コリントの信徒への手紙一

KEY WORDS

Eschatology, dualism of spirit and flesh, Satan, moral reasoning, the First Letter to the Corinthians.

要旨

サタンに引き渡され、滅ぼされるサルクスとは単なる物質的な肉のことではなく、近親相姦という性的不品行が体現された「罪ある肉体」のことである。他方、救われるべき Pneuma とは不品行者の人格や魂を代弁する「霊」ではなく、彼がキリスト信仰に入信した際に与えられ、彼の「霊」と融合し、なお彼に内在している「神の霊」のことである。パウロの宣告は黙示的終末論に根ざした二元論的世界観を前提としており、「すでに」と「まだ」という終末論的緊張に関わっている。この緊張関係の中で、信仰者の救いの実体を確認し、個々の行為に対する警告と審判を発する霊肉二元論が機能している。近親相姦者は彼の性的不品行によって「まだ」の状況を悪化させた。しかしパウロは「主の日に τὸ πνεῦμα が救われるために」、と「すでに」の状況に望みを託したのであった。

SUMMARY

This article argues that the *sarx* to be delivered to Satan for its destruction does

not mean the physical flesh but the sinful flesh, in which sexual immorality is embodied, while the *pneuma* to be saved is not the personality or mind of the incestuous man but God's *pneuma*, which was granted to him in conversion, integrated into his *pneuma*, and kept alive in him. The relevant sentence in 1 Cor 5:5 presupposes the dualistic worldview rooted in apocalyptic eschatology and concerns the eschatological tension between "already" and "not yet." In the midst of this tension, the dualism of spirit and flesh functions to confirm the reality of being saved and gives a warning and a judgment on individual behaviors. The incestuous man, through sexual immorality, worsened the "not-yet" situation. However, Paul gave hope for the "already" situation by saying, "so that the *pneuma* may be saved in the day of the Lord."

1. 問題の所在

1コリ5:5で使用されている σάρξ と πνεῦμα は何を示すのか、またそれに関連して εἰς ὄλεθρον τῆς σαρκός や ἵνα τὸ πνεῦμα σωθῆι をどのように理解するのか、さらに「サタンへ引き渡す」とはどういう意味なのか。原文が曖昧であることや σάρξ や πνεῦμα には意味の幅があることなどからひとつの解釈を絶対視することは出来ない。本小論では先行研究に学びながらも、当該箇所を考察する際今まで十分な注意を払って来なかった「終末論的霊肉二元論」の観点から上記の諸問題を再検討する。この考察を通して今まで理解されていなかったパウロの真意を明らかにしたい。

最初にパウロの倫理勧告の大前提となっている「すでに」と「まだ」という終末論的緊張関係を略述する。そして彼の倫理勧告においてそれが霊肉二元論と協働していることを論述しながら、1コリ5:5の諸問題を再検討する。

2. 終末論的緊張関係（「すでに」と「まだ」）

多くの研究者が考察しているように、¹ 黙示的終末論の特徴の一つとして「この世」と「来たるべき世」という二元論を挙げることができる。パウロは ὁ αἰὼν οὗτος、² ὁ αἰὼν ὁ ἐνεστώς πονηρός、³ γενεὰ σκολιὰ καὶ διεστραμμένη、⁴ ὁ κόσμος οὗτος、⁵ などの用語を使用しており、「この世」を神に敵対したものとして対象化していることが分かる。他方、「来たるべき世」という用語は使用していないが、キリストの再臨⁶や差し迫った終末の時、⁷ 怒りの日・主の日・審判の日、⁸ 将来現わされる栄光、⁹

ἄρτι-τότε の表現¹⁰を使用しており、「来たるべき世」という概念を持ち合わせていることは明らかである。なお、「神の国」¹¹や「永遠の命」¹²という表現も「来たるべき世」を象徴する表現として理解できる。

P. Vielhauer はユダヤ教黙示文書においてこの二元論に見られる「この世」と「来たるべき世」が重なり合うことはなく、お互い分離していることを考察している。「この世」が完全に過ぎ去ったあとに初めて、「来たるべき世」が樹立される。¹³つまり、終末はあくまでも未来に属し、二つの時代が共存することはない。自分たちは終末の神殿を予兆していると自負していたクムラン教団でさえ、終末はまだ到来していないと認識している。¹⁴

それに対して、パウロは「来たるべき世」はキリストの死と復活によって到来したと確信した。死人の復活はユダヤ教黙示文書において二つの時代の転換点に生じる出来事であったが、¹⁵彼はキリストの復活をその出来事として理解した。事実、キリストの復活を終末時に起こる出来事の ἀπαρχή として捉えている (1コリ15:20)。これは終末が到来し、もはや引き返すことができない事態が生じているという認識を示す。つまり、キリストの死と復活は二つの時代の転換点を刻印した。そしてこの出来事はパウロにとって決定的な一回きりの ἀποκάλυψις となった (ガラ1:12,16)。それゆえ、彼がこの出来事について語る時、アオリスト形もしくは完了形で表現している。¹⁶また、コリントの信徒に対して終末がすでに彼らに到来したことを言及し (1コリ10:11)、¹⁷ガラテヤの信徒には律法と信仰の関係を時間的経緯から説明し、信仰が到来した今、律法という養育係の下にはいないことを力説する。信仰の到来とは来るべき時代の到来、そして養育係としての律法はそれ以前の古い時代を示している (ガラ3:23-25)。さらにパウロは終末の πνεῦμα が信仰者にすでに与えられ、それが彼らに内在していることを繰り返し述べる。¹⁸πνεῦμα は救いの ἀρραβών (2コリ1:22; 5:5) であり、終末の収穫の ἀπαρχή (ロマ8:23) である。それゆえ πνεῦμα は信仰者が新しい時代を生きているということを継続して証しする役割をもっていた。

しかしながら、新しい時代の幕開けにもかかわらず古い時代であるこの世はまだ完全には過ぎ去っていない。この世の終焉はキリスト再臨時まで生じない。罪の勢力は今なお強く、信仰生活に影響を及ぼし (ロマ6-7章)、死の力も復活の体が与えられる終末まで効力がある (1コリ15:26;1テサ4:13-14)。このことは救いがまだ完成していないことを意味する。従ってパウロは救いを現在進行中のものとして、¹⁹まだ完成していないものとして捉えている。²⁰また、救いが未来に生じるものとして (ロマ5:9,10;11:26)、²¹そして将来に約束されている「永遠の命」(ロマ5:21;6:22,23)、あるいは、将来の「復活のキリストとの結合」として捉えている (ロマ6:5,8; フィリ3:11-12,21)。

このように古い時代が完全に過ぎ去る前に、キリストの出来事によって新しい時代がすでに到来してしまった。それゆえ、パウロの黙示的終末論においては二つの時代が重なり合っている。その結果、「すでに」と「まだ」という矛盾する事態が共存することになった。研究者が指摘しているように、²²この終末論的緊張関係に生きることがキリスト信仰者特有の自己理解を形作っていった。そして、この二つの事態の共存がキリスト信仰者への倫理勧告の大前提となる。この緊張関係はキリスト信仰者の道徳的葛藤を引き起こすが、その事情を最も的確に捉えているのが霊肉二元論と言えるだろう（ロマ8:4-13; ガラ5:13-6:10）。

信仰者は終末の $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ を受容したが、なお古き邪悪な時代に生きている。彼らのからだは $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota\varsigma$ を持っており、この時代を支配している邪悪な力に取り込まれやすい。 $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ の受容は新しい時代の決定的始まりを刻印する一方、 $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota\varsigma$ は古い時代である信仰以前の生活の名残を示す。信仰者の内にある $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ は天的エージェント（作用者）として重要な役割を持っているが、それは信仰者を新しい道徳的生活を維持させ、信仰以前の生活に陥らず、罪の力に負かされることのないように信仰者を助けてくれる。他方、 $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota\varsigma$ は $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ とは全く逆の役割を持っており、信仰者を古い時代に引き戻し、入信前の不道徳な生活へと誘惑する。 $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ と $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota\varsigma$ が拮抗する実存的状況はまさに「戦場」となる。²³この事態の発端は神が独り子イエス、そして $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ の派遣を通してこの世に介入したことに遡る。神の介入以来、拮抗した霊肉の戦闘が継続しているのである。

30年以上も前に K. Stendahl が指摘したように、従来の研究は「西洋の内省的良心」²⁴ のためにパウロの神学思想を正確に読み取ることが出来なかった。この「良心」への執着はユダヤ教の誤解にとどまらず、パウロがごく自然に所持していた黙示的思想や古代宇宙論の軽視を生みだした。霊肉二元論はそれが扱う実存的問題のために良心の呵責や罪意識といった心理学的観点から解釈される傾向にある。²⁵しかし天的エージェントとしての $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ が関与する終末論的緊張関係の観点から捉えることがパウロの理解に即したものと言えるであろう。次に霊肉二元論が終末論的緊張関係の中でどのように機能し、信仰者の実存を規定しているのか1コリントの二箇所から考察する。

3. 1コリント

3.1. 1コリント2:14-3:4

パウロはここで $\psi\upsilon\chi\iota\kappa\acute{o}\varsigma$ と $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha\tau\iota\kappa\acute{o}\varsigma$ という二つのタイプの人間を描いている（1コリ2:14-16）。²⁶前者は $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ を受けていない人で、それゆえ神の知恵を含め $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ の事柄を理解できない（1コリ2:7,12）。そしてその人にとって神の $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ に属する事

柄は愚かなものである (2:14)。後者は πνεῦμα を受けた人で、それゆえ神の知恵を理解し、すべてを判断できる (2:7,10,12,15)。ψυχικός と πνευματικός の対照的な用法は復活の体の議論の中にも出てくる (1コリ15:44)。人間の体は ψυχικός であり、復活の体は πνευματικός であるとパウロは主張する。そこには道徳的意味合いはほとんど見られないが、ψυχικός は人間存在の限界性や世俗性を表わしており、ψυχικός の体は腐朽性ゆえに神の国を受け継ぐことが出来ない σάρξ や αἷμα と同一視されている (1コリ15:50)。つまり、ψυχικός は σάρξ と αἷμα という朽ちる部類に属しており、朽ちない部類に属している πνευματικός と対をなしている。この点に関してパウロが ψυχικός という単語を πνεῦμα や神の知恵を認識できない人たちに当てはめて、他方、πνευματικός を πνεῦμα を受け、神の知恵と神の πνεῦμα に属する事柄を認識できる信仰者に当てはめていることは合点がいく (ただし信仰者の体は終末まで完全には πνευματικός ではないけれども)。

過去においてコリントの人たちに、πνευματικός として語りかけることが出来なかったことをパウロは率直に述べている。なぜなら彼らは σάρκινος な人たちであったからだ (1コリ3:1)。当時の彼らは「固い物」を口にすることができなかつたので「乳」を飲ませた (3:2)、と比喩的に表現されている。しかし今なお、「固い物」を口にするほどには成長していないことをパウロは指摘する。なぜなら彼らはまだ σαρκικός であるからだ (3:3)。²⁷ πνεῦμα を受け、入信した者は当然 πνευματικός と呼ばれるが、現在のコリントの信徒を πνευματικός として語りかけることは出来ない。²⁸ さらに、パウロは彼らが ψυχικός であることを示唆している。直前の箇所では πνευματικός と ψυχικός を対比させていたが (2:14-16)、3:1-3 では πνευματικός と σάρκινος/σαρκικός をもうひとつの対として提示している。πνευματικός に対比されたそれぞれの用語が同義的意味をもつことになる。すなわち、ψυχικός と σάρκινος/σαρκικός が同義的に使用されている。この推論は、パウロが復活の体の議論で ψυχικός を σάρξ の特徴である限界性や世俗性を意味するものとして使用していることから裏付けられる (15:42-50)。²⁹

こういうわけで、パウロはコリントの信徒が πνεῦμα を受けておらず神の知恵を理解できない ψυχικός で、かつ σάρκινος/σαρκικός として振舞っていることを批判している。換言するなら、彼らは入信以前の状態に留まっている、ということになる。もちろんコリントの信徒たちは、他のキリスト信仰者と同じく πνεῦμα をすでに受け、洗礼時にキリストと霊的結合を経験した人たちである (1コリ2:10,12;3:16-17;6:11,17,19;10:3-4;12:13)。しかし現在の振る舞いはその対極にあり、あたかも新しく創造されなかった人たちのものである。

コリントの信徒たちの間で ζήλος や ἔρις が絶えまないことをその理由としてパウロ

はあげている。彼らに生じていた党派主義は、いくつかの研究が明らかにしているように、当時の「修辞の文化」に根付いたもので、哲学や修辞学のサークルで教師や師弟に生じていた党派主義と類似している。³⁰このことは πνεῦμα を受け、信仰共同体に属しているキリスト者が今なお、この世の論理や習慣、文化的気風に捕われていることを示す。この現状をパウロは嘆き、σαρκικοί ἐστε καὶ κατὰ ἄνθρωπον περιπατεῖτε (1コリ3:3) と言い放っている。このような信仰者を πνευματικός として語ることは出来ない。

1コリ2:12で πνεῦμα τοῦ κόσμου と πνεῦμα τοῦ θεοῦ とを対比しながら、信仰者に与えられた πνεῦμα τοῦ θεοῦ は、過ぎ去るこの世には属さず、来るべき新しい時代に属する神の力であることを述べている。たとえこの世に生きなければならなくても、πνεῦμα τοῦ θεοῦ の所持によって信仰者はすでに新しい時代に属していることを実感できることをパウロは訴えている。信仰者はもはやこの世に属する ψυχικός でも σάρκινος/σαρκικός でもなく、すでに新しい時代に属する πνευματικός なのである。そして、「すでに」と「まだ」の相違を認識するだけでなく、日常の行いによってその違いを体現する必要性があった。しかし、ζήλος と ἔρις はガラ5:20の σάρξ の悪徳表に含まれているように、コリントの信徒たちは σάρξ の業を実践していた。それは σάρξ の欲望を満足させ (ガラ5:16)、σάρξ に従って歩んでいる有様であった (ロマ8:4)。

3.2. 1コリント6:12-20

「σάρξ に従って歩む」(ロマ8:4,13)、「σάρξ の欲望を満たす」(ガラ5:16)、そして「σάρκινος/σαρκικός である」(1コリ3:1-3) と批判される最も深刻なケースは性的不品行 (πορνεία) である。πορνεία やそれと同質の行為はパウロの手紙の悪徳表で必ず最初にあげられる。³¹1コリ6:12-20は売春の問題を扱っているが、パウロは信仰者の σῶμα がキリストの体の一部であり、πνεῦμα が宿る神殿であり、さらに終末時に復活を経験する大切な存在であると力説している。信仰者の σῶμα は主のために存在し、主によって買い取られ、もはや自分自身のものでない。このような「からだの神学」³²に基づくならば、信仰者は自分の σῶμα を自由に扱うべきでなく、主のために聖なるものとして終末まで維持しなければならない。それゆえ性的純潔が要求されるのは当然である。

このように「からだの神学」がここでは支配的である一方、霊肉二元論が6:16-19で機能していることが分かる。パウロは売春婦との結合と主イエスとの結合を対比し、前者との結合は「一つの肉 (εἰς σάρκα μίαν)」となることであり、後者では「一つの霊 (ἐν πνεύμα)」になることであると説明する。H. Conzelmann が指摘しているよ

うに、³³引用された創世記2:24では *σάρξ* は否定的意味をもたず、物質的な意味合いが強い。それゆえ、霊肉二元論で見られる否定的な意味を直ちに *σάρξ* に見出すことは困難である。しかし、*σάρξ* が主イエスとの霊的な結合に対比された売春婦との肉結合を示すために使用されていることを考慮すると、否定的なニュアンスを無視することはできない。*πορνεία* が *σάρξ* の悪徳表の冒頭に掲げられることは両者が切っても切れない関係であることを物語っている（ガラ5:19）。

さらに、パウロが1コリ6:17でなぜ *πνεῦμα* を使用するのかその理由に注意を払う必要がある。すでに指摘したように、ここでは「からだの神学」が支配的であり、*σῶμα* の使用が期待される。実際、信徒の *σῶμα* がキリストの体の一部（*μέλος*）であるといっているように（6:15）、主イエスとの結合を *σῶμα* 同士の結合であると表現しても問題はなかっただろう。³⁴しかしパウロは6:17で *σῶμα* ではなく、*πνεῦμα* を使用する。これによって彼は *πνεῦμα* と *σάρξ* という対比を持ち込んでいることが分かる。M. M. Mitchell も認識しているように、³⁵主イエスとの霊的な結合とそれ以外の肉結合とが本質的に異なることを示す上で、霊肉二元論が効果的に機能していると言える。この二元論の導入によってパウロはコリントの信徒に決定的な救いの体験を思い起こさせることが出来ただろう。その体験とは主イエスと霊的に結合するという洗礼の出来事である（1コリ6:11;12:13; ロマ6:3-8; ガラ3:27）。これは終末論的緊張関係における「すでに」の事態であり、*σάρξ* で象徴される「まだ」の事態と対照をなすものである。このように主イエスとの霊的結合を思い起こさせることで、信仰者たちが *σάρξ* の悪徳にまみれた過去の生活から清められたことを確認している。この信念に基づくならば売春婦との肉結合は全くあり得ない。しかしながら、現実には肉結合がまだ可能であった。信仰者の *σῶμα* はまだ完全に *πνευματικός* ではなく、終末の日に *σῶμα πνευματικόν* に変態するまで *σάρξ* を抱えているからである（1コリ15:42-54; ロマ8:22-23）。

当時、職業として流布していた売春業³⁶をキリスト信仰入信後も躊躇なく利用していた信徒は主イエスとの霊的結合とその他の肉結合が相容れないことを認識していなかった。売春はこの世に属する *σάρκινος/σαρκικός* の振る舞いであり、事実、その結合とはこの世のエージェントである遊女との結合である。この振る舞いは新しい時代に属し、神のエージェントであるキリストと霊的結合をした *πνευματικός* の振る舞いとは相容れない。主の杯と悪霊の杯の両方を飲むこと、あるいはその食卓を共有することが出来ないように（1コリ10:20-21）、信仰者と遊女との結合もあり得ない。³⁷パウロにとって *πορνεία* は旧約聖書で禁止されているから、あるいは道徳的感性に照らし合わせて相応しくないから忌避すべきものである、ということではない。キリスト信仰者はすでに霊的な結合を主イエスと経験しており、キリストの体の一部であ

り、*πνεῦμα* がすでに宿っている神殿であるから、そのような性的不品行はあり得ないのである。しかし信仰者は完全には *πνευματικός* ではなく、その「まだ」の事態が売春婦との肉的結合という形で不幸にも露呈されてしまった。それに対して、パウロは両結合を霊肉二元論に基づいて対比することで、信仰者と *πορνεία* との非両立性を強調している。

このようにパウロの倫理勸告において終末論的霊肉二元論が機能していることが分かった。この二元論を基軸に1コリ5:5の諸問題を再検討する。

4. 1コリント5:5

4.1. 近親相姦者の *σάρξ*

1コリ5:5の *σάρξ* が何を意味するのか大きく二つの見方に分かれる。一つは物質的意味での肉体を意味する。もう一つは近親相姦で露呈した不道徳的性質もしくは性癖を意味する。この問題は *παραδοῦναι τὸν τοιοῦτον τῷ σατανᾷ εἰς ὄλεθρον τῆς σαρκός, ἵνα τὸ πνεῦμα σωθῆ ἐν τῇ ἡμέρᾳ τοῦ κυρίου* という宣告をどのように解釈するのかに関わってくる。ある研究者たちはこの宣告は近親相姦を犯した者の死を意味していると考え³⁸。この意見の場合、*εἰς ὄλεθρον* は1テサ5:3、2テサ1:9、1テモ6:9にあるように終末論的破壊を意味する。また、死の力を持つ悪魔³⁹や荒野でイスラエルの民の一部を死に追いやった *ὀλεθρευτής* (1コリ10:10) の事例との類似を指摘できる。また、旧約聖書は言うまでもなく、⁴⁰1コリ11:30、使徒5:5;13:11にあるように、死や病気は不品行者へのごくありふれた罰であったことを指摘できる。しかしながら、いくつかの理由でパウロが近親相姦者の死を意味したのか疑問が残る。

まず、この解釈では *ἵνα* 節を十分に説明できない。なぜなら、死刑という罰と救いが矛盾するからである。しかし、パウロはここで人間を *ψυχή* と *σῶμα* から理解するプラトンの二元論を借用しており、*σάρξ* の死と *πνεῦμα* の救いは矛盾しないと反論できるかもしれない。⁴¹この二元論に基づくなら、救いは *ψυχή* (ここでは *πνεῦμα*) が死を通して *σῶμα* (ここでは *σάρξ*) から解放されることで実現する、そのことをパウロは意図している、と。この可能性は否定できないが、パウロの霊肉二元論とプラトンの二元論とを同義として判断することには慎重であるべきである。なぜなら、彼は *σῶμα* 自体が悪いものとは捉えていなかったし、*σάρξ* さえも「救いを得るために離脱しなければならぬ対象」としては捉えていなかった。さらに、復活の体は *πνευματικός* であるが、*σῶμα* という型をもっていると考え (1コリ15:44)、また、現在と将来 (終末) と継続して *σῶμα* の重要性を説いている (1コリ6:13-14)。これはプラトンの靈魂不滅の理解とは異なる。

次に、パウロが道徳的不品行者につき合うな、食事も共にするなという勸告をして

いるが(1コリ5:11)、文脈から近親相姦者を含めてこれを語っていることが分かる。つまり、信仰共同体が追放したあとも近親相姦者と出会う可能性があるかと推察できる。このことは、*παραδοῦναι τὸν τοιοῦτον τῷ σατανᾷ εἰς ὄλεθρον τῆς σαρκός* という宣告をもってパウロが直ちに不品行者の死を想定していたのではないことを示す。すなわち、宣告のポイントは不品行者の *σάρξ* を信仰共同体からサタンへ引き渡すことであって、該当者の死を意図しているのではない、ということになる。

また、治療的懲罰や呪詛など別の解釈が可能であり、その場合も共通して死刑解釈を支持しない。これらの解釈では *ὄλεθρος* の意味を「死」ではなく、1テモ1:19-20の場合のように、治療的あるいは懲治的目的をもった追放を意味し、その具体的な宣告に「信仰共同体の外へ」、つまり、「サタンに引き渡される」という表現がともなった、と考える。この追放を通して該当者は自分の行いを悔恨し、悔い改めに導かれるチャンスが与えられる。⁴² 該当者はサタンによって身体的罰を与えられ、苦痛を味わう。⁴³ このサタンの役割はヨブに「骨と肉」の苦しみを与えるが、死に至らしめることはしないサタンの役割を想起させる(ヨブ2:5-6)。⁴⁴

他方、ある研究者はサタンの手に引き渡す(*παραδίδομι*)という表現は財産の喪失、悲劇、疾患、可能性として死を含む強力な呪詛を意味していると考ええる。⁴⁵ また、パウロは共同体による裁決が該当者に下される状況を主イエスの *ὄνομα* と *δύναμις* に言及して説明しているが(1コリ5:4)、この描写も呪詛の状況を整える。⁴⁶ さらに、彼が呪詛を発することは珍しくはない(1コリ16:22; ガラ1:8,9)。このように、治療的罰あるいは呪詛の解釈においても、パウロが近親相姦者の死を直ちに⁴⁷期待して宣告をなしているのではないことが確認される。さらに更生を目指した懲罰的な判断は、共同体による罰を十分に被った信徒への赦しを促すパウロの牧会的資質に合い通じるものである(2コリ2:5-11)。

以上、考察してきた死刑解釈、懲罰的解釈、呪詛解釈は共通して *σάρξ* を死、罰、あるいは呪いを受ける物質的な対象として捉えている。しかし J. D. G. Dunn が主張するように、*σάρξ* を「物質的な含蓄がある場所」と「道徳的な含蓄がある場所」という分離した二つのカテゴリーに分けることは出来ない。なぜなら、*σάρξ* は意味の連続体(スペクトル)をもっているからである。⁴⁸ この見解は A. C. Thiselton が重複する二つの言語カテゴリーから *σάρξ* を捉えようとする姿勢に相通じる(「言語の記述的用途」と「言語の評価的用途」)。記述と評価の基本的区別は可能であるが、「言語は純粹に記述のために、あるいは純粹に評価のために専有されることはめったにない」。⁴⁹ 確かに1コリ5:5における *σάρξ* は物質的意味が支配的である(記述的用途)。しかし、*σάρξ* の意味の連続体と性的不品行というここでの主題を考慮すると、*σάρξ* という言語に伴う肉的性質・性癖を見逃すことは出来ない(評価的用途)。また、注目

すべきことは1コリ5:11に列記された悪徳のうち一つを除いてすべてがガラ5:20の σάρξ の悪徳表に符合する。⁵⁰この意味で近親相姦者は σάρξ の悪徳を具現した人物であると言える。このような観点から、破壊される σάρξ とは単なる肉体ではなく、σάρξ がもつ肉的性質・性癖であると解釈することができる。⁵¹しかし Thiselton 自身認識しているように、肉体としての σάρξ (記述) と性癖としての σάρξ (評価) は重複するため、二つの意味を完全に分離することは出来ない。

以上から第三の解釈を導くならば、ὄλεθρος の意味を字義通りに「破壊」と捉える一方、σάρξ を無害な物質的肉体としてではなく、また近親相姦者がその事例で露呈した肉的性質・性癖としてではなく、そのような性癖が体現された「罪ある肉体」として解釈できないだろうか。この解釈の場合、σάρξ の破壊とは生物学的死を直ちに意味するのではなく、罪ある σάρξ の死を意味する。この点について、パウロ自身表現を曖昧に放置していることは否定できない。しかし彼自身、直接的に死刑宣告を意味したかったのではなく、不品行が体現された罪ある σάρξ を信仰共同体から完全に放逐することを強調したかったと推察できる。この解釈は、ガラ5:24で表明されている彼の主張によって補強される。すなわち、οἱ δὲ τοῦ Χριστοῦ τὴν σάρκα ἐσταύρωσαν σὺν τοῖς παθήμασιν καὶ ταῖς ἐπιθυμίαις。十字架につけて滅ぼされる σάρξ は人畜無害の単なる物質的肉体ではなく、πάθημα や ἐπιθυμία が伴い、それらが体現される σάρξ であることが語られている。しかしここでパウロは信仰者の生物学的死を意味しているのではない。

最後に、どのようにサタンが懲戒的な道具として協力するのか、という問題が残る。サタンは人の肉的性質を誘発するのであって(1コリ7:5)、自分のいわば同盟者でもある罪ある σάρξ を破壊することに協力するのだろうか? パウロはこの問題について何も語っていない。しかし B. Witherington が提案しているように、⁵²「サタンが直接に σάρξ を破壊する」ではなく、「サタンの王国・領域に引き渡される」と解釈することが可能である。そして σάρξ の滅びはサタンの王国・領域へ引き渡されたあとの事情であり、サタンが直接手を下すのかどうかは定かではない。つまり、ここで主眼はサタンによって直接的に破壊されることにではなく、σάρξ の破壊のためにサタンの王国・領域に移行することにある、と解釈できる。

παράδιδωμι の用法を知ることによってこの解釈は一段と確かなものとなる。この動詞は「伝承を伝える」(1コリ11:2,23;15:3)という大切な意味を持っていると同時に、権威・力・所有権の変更を意味する。⁵³ロマ1:24,26,28では「神の支配領域」から「情熱や情欲に満たされた領域」への移行を表わし、2コリ4:11ではイエスのために死に渡されるという十字架の死の追体験が語られる。イエスが死に渡されるという移行もこの動詞が使用されている(ロマ4:25; 8:32;1コリ11:23; ガラ2:20)。これは生から死への移行

である。これらの箇所では「引き渡す」先は否定的な領域である。1コリ13:3では移行先は明白ではないが、死に体を引き渡すことが示唆されている。1コリ15:24ではキリストの力が神に移管されることが語られており、引渡し先は肯定的な領域である「神の領域」である。以上の考察から移行先が肯定的で神聖なところであろうと、否定的で邪悪なところであろうと、*παραδίδομι* は「ある支配」から「別の支配」へとという後戻りできない移行を示し、移行後、それに関わった人や事柄は決定的な変化を経験する、ということが言える。

παραδίδομι のこのような意味の含蓄を考慮すると、「サタンに引き渡す」という表現でもって *σάρξ* が別の力・権威の支配領域、つまり、サタンの王国・領域へ完全に移行されることをパウロは意味したと言える。ここで、彼が黙示的二元論に基づいた世界観を持っていたことを確認することが重要である。この世界観によると、この時代は「この世の神」やサタンの力を含む邪悪な勢力に満ちており、その行く末は滅びである（1コリ1:18;2:6;7:31;15:24-26;2コリ4:4）。近親相姦者によって肉的性癖が体现された *σάρξ* は *πνεῦμα* が臨在する信仰共同体に存在すべきではなく、邪悪なこの世、つまり、滅びに向かうサタンの王国・領域に属すべきである。ガラ5:17で言及されているように *σάρξ* は *πνεῦμα* に敵対する天的エージェントになり得るもので、「神の国」を継承する信仰共同体に存在すべきではない。サタンに引き渡すことによる *σάρξ* の滅びとはこのような世界観に基づいて語られていることに留意すべきである。

近親相姦者は自らの不品行によって「信仰者がまだ *σάρξ* に生きている」という「まだ」の状況を劣悪な形で体现した。彼が露呈した *σάρξ* の肉的性癖、そしてそれが体现された *σάρξ* は滅びの運命に移管される。しかし彼はいち信仰者であり、そこには「すでに」の部分が内在している。この宣告のもう一つの課題である「救われるべき *πνεῦμα*」とは何を意味しているのか次に考察する。

4.2. 近親相姦者 *πνεῦμα*

πνεῦμα は真正パウロ書簡で約120回も使用されている。そのほとんどが聖霊もしくは神の霊、キリストの霊を意味する。⁵⁴1コリ5:5の *πνεῦμα* は通常、「彼の霊」と訳されているように「人の霊」として解釈されている。しかしテキストは *τὸ πνεῦμα* であり、「彼の」を示す指示代名詞はない。直訳すると「その霊」となる。パウロは近親相姦者の霊を明示したかったのであれば、*αὐτοῦ* をつけただろう。結果として曖昧さを残す形になったが、本小論では、この曖昧さの背後に何があるのかを積極的に注目したい。すでに考察した霊肉二元論、終末論的緊張関係の観点から *τὸ πνεῦμα* の意味を考察する。

結論を先に述べると、ここには「神の霊」と「人の霊」の両方が意味されていると

推察できる。すなわち、神の霊と人の霊が融合・統合した πνεῦμα である。信仰者がすでに πνεῦμα を受け、その πνεῦμα が信仰者の中に継続して臨在している場合、πνεῦμα が人間の霊を意味しているのか、神の霊を意味しているのか区別が困難な場合がある。パウロ書簡の中から1コリ5:5の解釈にとってより示唆的で重要な箇所を取り上げて、この解釈の論拠としたい（ロマ8:10,15-16;1コリ6:17）。⁵⁵

パウロは εἰ δὲ Χριστὸς ἐν ὑμῖν, τὸ μὲν σῶμα νεκρὸν διὰ ἁμαρτίαν τὸ δὲ πνεῦμα ζωὴ διὰ δικαιοσύνην（ロマ8:10）と語っているが、μεν-δε という連結句を使って σῶμα と πνεῦμα を対比している。σῶμα はロマ6:6や7:24と同様、罪に支配され、死に定められた人間の体を示す。それゆえ、πνεῦμα もまた人間の霊を示すと理解できる。⁵⁶しかし、全体の議論の趣旨は神の πνεῦμα が臨在している信仰者が生きる新しい ζωὴ を説明することである。J. D. G. Dunn が指摘するように、⁵⁷神の πνεῦμα と人が生きる ζωὴ が繰り返し関係づけられている（8:2,6,11,13）。それゆえ、死に定められた σῶμα と対比された πνεῦμα は、人間としての信仰者がもつ人間の πνεῦμα であると同時に、信仰者に臨在し、ζωὴ を与える神の πνεῦμα（8:9,11）でもあると考えることができる。

神の πνεῦμα と人間の πνεῦμα はそれぞれ独立した実体であるが、両者の融合状態はロマ8:15-16でも前提にされている。パウロは「アッパ、父よ」と信仰者を叫ばせる神の πνεῦμα の機能について言及し、αὐτὸ τὸ πνεῦμα συμμαρτυρεῖ τῷ πνεύματι ἡμῶν ὅτι ἐσμὲν τέκνα θεοῦ と説明する。ガラ4:6と違いここでは人間の πνεῦμα が言及されていることに注目すべきである。この説明は人間の霊的な次元が「神の霊がその啓示的・贖罪的力を伝達する次元」⁵⁸になり得ること、そして人間の πνεῦμα と神の πνεῦμα とが何らかの方法で交流、対話、同意することを示唆している。⁵⁹事実、パウロは神の πνεῦμα が人間の心の奥底に関わり、執り成しの祈りを発することを知っている（ロマ8:26-27）。このような協働作業は神が人間に神の πνεῦμα を送ったことによって開始された。それはまさに決定的な救いの経験であり、入信の出来事であった（8:15。アオリスト時制 ἐλάβετε を使用）。この過去の経験は今なお現在、有効であり、神の子であることを証しする（8:16。現在時制 ἐσμὲν を使用）。このように神の πνεῦμα と人間の πνεῦμα が融和し、それが救いの経験であり続けていることを認識するならば、ロマ8:10の πνεῦμα が神の霊であるか、人間の霊であるかを判別する必要性はなくなる。なぜなら、両者の融和、ないし統合が前提にされているからだ。

1コリ6:17もまた、神の πνεῦμα と人間の πνεῦμα の統合を前提にしていると解釈できる。パウロは ὁ δὲ κολλώμενος τῷ κυρίῳ ἐν πνεύμα ἔστιν と洗礼時の主との結合の経験を想起させている。洗礼は神と人間の交流・交信が不可欠な重要な機会であるが、その核となる出来事が「主と一つの πνεῦμα」となることである。具体的にどの

ように結合が生じるのか分からないが、人間側の霊的なものと主の霊的なものが結合して、一つの $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ となると考えるのが自然であろう。その結合は本来的に肉体的結合ではあり得ない。となると、人間の $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ が主の $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ と結合すると推定できる。その結合では二つの別々の $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ が共存するのではなく、一つの $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ があるのみである。⁶⁰W. A. Meeks は洗礼儀式において入信者は神の $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ を受け、「アッバ、父よ」と叫びの応答をする、と推察している。⁶¹すでにロマ8:15-16で見たようにこの叫びは神の $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ と人間の $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ の交流、融合を示す重要な救いの出来事である。このように、それぞれの $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ が一つとなり、その結合を通して、破壊することができないキリストとの結合を信仰者は体験するのである。⁶²その意味で「 $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ の神殿としての信仰者の体」(1コリ6:19)とは単なる比喩的表現ではなく、救いの実存的事態を示している。以上の考察から、1コリ6:17の $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ は信仰者の体に臨在し、活動する、「神の $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ と人間の $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ が融合した $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ 」であると解釈できる。

では、1コリ5:5の $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ はどのような $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ なのだろうか。すでに見たように、滅ぶべき $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota\varsigma$ は肉的性質・性癖を体現した $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota\varsigma$ を指している。それゆえ、救われるべき $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ は霊的性質（道徳的資質）を内包する $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ と解釈できる。たとえば、J. Murphy-O'Connor は $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota\varsigma$ と $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ はそれぞれ違った角度からみた人間全体を示していると解釈する。 $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ は「神を志向するところの人格全体」を、 $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota\varsigma$ は「神から乖離していくところの人格全体」を示す、と。⁶³このような解釈は理解できるが、パウロの倫理勸告は人格的志向を第一の課題として持っているのではなく、決定的な救い・入信の出来事を契機として信仰者に神の $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ が与えられ、それが今もなお継続し、信仰者の道徳的生活において有効であるという事態に基づいていることを見逃してはならない。

無論、1コリ5:5はそのような救いの出来事について触れていない。しかし続く節が(5:7-8)重要な手がかりを与えてくれる。パウロは入信・洗礼における実存在的変化について、信仰者を「パン種が入っていないもの ($\acute{\alpha}\zeta\upsilon\mu\omicron\varsigma$)」として喩える。 $\acute{\alpha}\zeta\upsilon\mu\omicron\varsigma$ としての信仰者は「悪意と邪悪の古いパン種 ($\zeta\acute{\upsilon}\mu\eta$)」と対比され、新しい純粋なパンでキリストの過越祭を祝うことを求められている。 $\acute{\alpha}\zeta\upsilon\mu\omicron\varsigma$ とは「 $\zeta\acute{\upsilon}\mu\eta$ がない」ということである。 $\zeta\acute{\upsilon}\mu\eta$ は比喩的に使用されて、しばしば「良くない、不道徳な、邪悪な」を意味する。⁶⁴よって、 $\acute{\alpha}\zeta\upsilon\mu\omicron\varsigma$ は悪意、不品行、邪悪がない状態を意味することになる。生贄の小羊としてのキリストがここでは言及されているので、救済論的意味合いを読み取るならば、 $\acute{\alpha}\zeta\upsilon\mu\omicron\varsigma$ の喩えには信仰者の救い・入信の経験、すなわち、洗礼時に $\pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha$ を受け、すべての罪が洗われたこと(1コリ6:11)、あるいは実存的・内的変化を経験したこと(2コリ5:14-17; ガラ6:13)が示唆されていると言える。⁶⁵こ

れらを考慮して *καθώς ἐστε ἄζυμοι* の敷衍的解釈を施すならば、「あなたたちはパン種が入っていない者なのです。それはあなたたちがキリストにおいて洗礼を受け、キリストにおいて新しく造られたからです」となるだろう。無論、過越祭は新しい創造や内的変化などのイメージを本来持ち合わせていない。しかしその祭典は神の民としてのイスラエルが原初的に形成されたことを記念して祝うものであり、原初的形成というモチーフはキリスト者としての誕生、すなわち、救い・入信の体験を連想させるのに一定の効果はあっただろう。

さらに、ここでパウロの倫理勧告の特徴を想起することが重要である。彼は常に信仰者がすでに変化した経験を前提に語る。すなわち、信仰者が「すでに」体现していることに基づいて勧告を行う。B. Witherington が説明しているように、⁶⁶パウロの倫理勧告は、「自分がすでにそうであるようになりなさい、キリストがあなたに働いたそのままを体现しなさい」という主旨をもつことがしばしばである。彼の勧告は信仰者がすでに経験した変化に基づいたものである。こういうわけで、「あなたたちはいつも新しい練り粉のままではなさい。現にあなたたちはパン種の入っていない者なのだから」と語ったのである。

このような救い・入信の体験における実存的意義がパウロの倫理勧告では常に前提とされていることを考慮するとき、近親相姦者自身、そのような体験をした信仰者であることは重大な意味を持つ。換言すると、彼は洗礼時に *πνεῦμα* を受け、内的変化などを経験した。そして彼の *σῶμα* は *πνεῦμα* が宿る神殿である。パウロが1コリ5:5で「救われるべき *τὸ πνεῦμα*」を言及したとき、これらの事情を念頭に語ったと推察しても間違いではないであろう。⁶⁷この点において、E. Schweizer の洞察は有意義である。彼によると、1コリ5:5の *τὸ πνεῦμα* は人間に与えられた神の *πνεῦμα* であり、ただしそれが新しい「わたし」を創造する限りにおいてそうである。それゆえ、もしキリスト者であることを辞めるならば、新しい「わたし」は消滅する、と。

近親相姦者は信仰者として、神の *πνεῦμα* と人間の *πνεῦμα* とが融合された *πνεῦμα* を保持しており、パウロはその *πνεῦμα* が救われることを祈念したと言えるだろう。近親相姦者は性的不品行によって「すでに」の状況を矮小化し、「まだ」の状況を悪化させた。彼は「すでに」と「まだ」という終末論的緊張関係の只中で均衡を失った。しかしながら、パウロは「すでに」の状況に望みを託し、「主の日に *τὸ πνεῦμα* が救われるために」と祈願した。この慈悲的な見通しは1コリ3:15で終末時にそれぞれの業が吟味され、たとえ燃え尽きて損害を受けたとしても、その火を通して救われることを言及していることに符号する。信仰を持たない者と違い、信仰者は洗礼を受け、内的変化を経験している。たとえ生前に行った業が無価値なものとして燃え尽きても、たとえ道徳的不品行を犯し、信仰共同体から追放されても、救いのチャンスが

なお残されていることをパウロは認めている。何が彼をこのような認識に至らせたのかは不明であるが、入信・洗礼時の $\pi\nu\epsilon\hat{\upsilon}\mu\alpha$ の受容とそれに伴う実存的变化がひとつの要因であったことは間違いないであろう。

パウロは1コリント5:5で決して折り合いのつかない二つの事態に直面した。赦すことの出来ない $\pi\omicron\rho\nu\nu\epsilon\acute{\iota}\alpha$ とそれが信仰共同体に臨在していること、そして違反者が信仰者であり、その人物の $\pi\nu\epsilon\hat{\upsilon}\mu\alpha$ と神の $\pi\nu\epsilon\hat{\upsilon}\mu\alpha$ は堅固に結びついており、それがなお有効であること。パウロはどちらの事態も無視することは出来なかった。よって $\pi\omicron\rho\nu\nu\epsilon\acute{\iota}\alpha$ が体現された $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota$ をサタンの領域へと追放することでその滅びを、そして信仰者が保持する $\tau\acute{o}$ $\pi\nu\epsilon\hat{\upsilon}\mu\alpha$ の救いを祈願した。ここに「すでに」と「まだ」という緊張関係の下に終末論的霊肉二元論が機能していることが分かる。

注

- 1 例え、P. Vielhauer, "Apocalypses and Related Subjects," in *New Testament Apocrypha* (Philadelphia: Westminster Press, 1965) 2:581-607; M. C. de Boer, "Paul and Apocalyptic Eschatology," in *The Encyclopedia of Apocalypticism* (New York: Continuum Publishing Company, 1998) 1:348-49.
- 2 ロマ12:2;1コリ1:20;2:6,8;3:18;2コリ4:4。
- 3 ガラ1:4。
- 4 フィリ2:15。
- 5 1コリ3:19;5:10;7:31。
- 6 1コリ 1:7-8; 4:5; 11:26; 15:23-24; 2コリ 1:14; 5:10; ロマ 8:34; フィリ 1:6, 10; 2:16; 3:20-21;1テサ 1:10; 2:19; 3:13; 4:13-5:11; 5:23。
- 7 1コリ 7:26, 29, 31; 10:11; ロマ13:11。
- 8 1コリ3:13; 5:5; ロマ2:5, 16; ガラ 6:8-10。
- 9 ロマ8:18-19, 23。
- 10 1コリ13:12など。
- 11 ロマ 14:17; 1コリ 4:20; 6:9, 10; 15:24, 50; ガラ 5:21; 1テサ2:12。
- 12 ロマ2:7; 5:21; 6:22, 23; ガラ6:8。
- 13 Vielhauer, "Apocalypses and Related Subjects," 2:588。例え、2バルク31:5; 44:8-15; 83:1-23;4エズラ 7:50, 112-14, 119。
- 14 1QS 8:1-10; 11QT/11Q19 29:8-9; 1QSa/1Q28a 2:8-9。
- 15 例え、イザヤ26:19; ダニエル12:2-3; ソロモンの詩篇 3:12;1エノク10:17; 22:13; 61:5; 62:15-16; 4エズラ 7:32, 37; 2バルク30:1-2; 50:2-4; 51:1-16; ベニヤミンの遺訓10:6-10; シビュラの託宣 4:180-4; ヨハネ 11:24。
- 16 ἦλθεν, ἐξαπέστειλεν (ガラ4:4)。παρῆλθεν, γέγονεν (2コリ5:17)。

- 17 τὰ τέλη τῶν αἰώνων κατήντηκεν。
- 18 1 コリ2:12-15; 3:16; 6:19; 12:3-4, 13; 2 コリ1:21-22; 5:5; ガラ3:2-5, 14; 4:6; 1 テサ4:8; ロマ5:5; 8:9, 11, 15, 23。
- 19 現在分詞形 σωζόμενοι「救われていく者たち」(1 コリ1:18; 2 コリ2:15)。
- 20 からだの最終的な贖いは終末に完成 (ロマ8:23-25; 1 コリ15:42-57; ガラ5:5)。
- 21 未来形 σωθήσεσθαι「救われるだろうこと」。
- 22 例えば J. P. Sampley, *Walking Between the Times* (Minneapolis: Fortress Press, 1991) 7-24。
- 23 E. Käsemann, *Perspectives on Paul* (Philadelphia: Fortress Press, 1969) 67; J. L. Martyn, *Theological Issues in the Letters of Paul* (Nashville: Abingdon Press, 1997) 111-23, 251-66。
- 24 K. Stendahl, "The Apostle Paul and the Introspective Conscience of the West," in *Paul among Jews and Gentiles* (Philadelphia: Fortress Press, 1976) 78-96。
- 25 代表例として R. Bultmann の実存主義的解釈 (*Theology of the New Testament* [London: SCM Press, 1956] 1:314-52)。
- 26 ψυχικός と πνευματικός がそれぞれ霊的熱狂者とそうではない信仰者を示していると考える研究者もいるが (H. Conzelmann, *1 Corinthians* [Philadelphia: Fortress Press, 1975] 57, 59)、文脈からそのような信仰者間の霊的素養の差異をパウロが語っているようには思えない。コリントの信者の中には自分が霊的であると自負している者がいたようだが、パウロがそのような霊的な位付けをしていることを示すところは見られない。むしろ、ψυχικός と πνευματικός はそれぞれ非信仰者と信仰者を表していると解釈するのが一番自然である (G. D. Fee, *The First Epistle to the Corinthians* [Grand Rapids: Eerdmans, 1987] 99-101)。
- 27 σάρκινος (1節) と σαρκικός (3節) をパウロは同義的に使用している。一般には後者は倫理的ニュアンスを含み、前者は物質的意味合いがある (BAGD)。
- 28 πνευματικός と自負していた一部のコリントの信者にとってこの評価はショックであっただろう。
- 29 A. Robertson と A. Plummer は ψυχή は σώρξ の活動源もしくは相補関係にあると考えている (*A Critical and Exegetical Commentary on the First Epistle of St. Paul to the Corinthians* [New York: Scribner's, 1911] 49)。
- 30 S. K. Stowers, "Social Status, Public Speaking and Private Teaching," *NovT* 26 (1984): 73; L. L. Welborn, "On the Discord in Corinth," *JBL* 106 (1987): 85-111。
- 31 ガラ5:19-21; 1 コリ5:11; 6:9。
- 32 J. A. T. Robinson, *The Body* (London: SCM Press, 1952); R. H. Gundry, *Sōma in Biblical Theology with Emphasis on Pauline Anthropology* (Cambridge: Cambridge University Press, 1976)。
- 33 Conzelmann, *1 Corinthians*, 111。
- 34 P. W. Meyer, "The Holy Spirit in the Pauline Letters," *Int* 33 (1979): 15。
- 35 M. M. Mitchell, *Paul and the Rhetoric of Reconciliation* (Louisville: Westminster/John Knox Press, 1991)

- 234。
- 36 R. MacMullen, *Roman Social Relations 50B.C. to A.D.284* (New Haven: Yale University Press, 1974) 86。
- 37 売春婦との肉的な結合がキリストとの霊的な結合を破壊する恐れをパウロは抱いていたかもしれない。
- 38 G. Forkman, *The Limits of Religious Community* (Lund, Swed.: C. W. K. Gleerup, 1972) 145-46; I. Havener, "A Curse for Salvation—1 Corinthians 5:1-5," in *Sin, Salvation, and the Spirit* (Collegeville, Minnesota: Liturgical Press, 1979) 340-41。
- 39 ヘブ2:14; ヨハネ8:44; ヨベル 10:2; 48:2-3; 49:2; 1QS 4:12-14; CD 2:5-7。
- 40 たとえば、近親相姦、姦淫、偶像礼拝、獣姦、魔術を行う者に対する死刑（レビ20:1-27; 出22:18-20）。
- 41 Gundry, *Sōma*, 143。
- 42 J. T. South, "A Critique of the 'Curse/Death' Interpretation of 1 Corinthians 5.1-8," *NTS* 39 (1993): 545。
- 43 Robertson and Plummer, *Corinthians*, 99; A. Schweitzer, *The Mysticism of Paul the Apostle* (New York: The Macmillan Company, 1955) 330。
- 44 無論、ヨブ記と1コリント5章とは事由がことなる。神の使者として信仰者に試練を与えるサタンの役割がヨブ記には描かれており、それはむしろ2コリ12:7でのサタンの役割と類似している。
- 45 A. Y. Collins は παραδίδωμι が違反者を超自然的力に引き渡す魔術上の専門用語であることを指摘している ("The Function of 'Excommunication' in Paul," *HTR* 73 [1980]: 255-56)。
- 46 福音書記者は ἐν τῷ ὀνόματι Ἰησοῦ Χριστοῦ による悪霊祓いや癒しを知っている（マルコ9:38; ルカ10:17; 使3:6; 4:7,10; 16:18）。
- 47 無論、近親相姦者が死の危険から完全に免除されているわけではない。彼が悔い改めなかった場合、あるいは重い疾患を被った場合、死に直面する可能性は高くなる。
- 48 J. D. G. Dunn, "Jesus—Flesh and Spirit," *JTS* 24 (1973): 44。
- 49 A. C. Thiselton, "The Meaning of ΣΑΡΞ in 1 Corinthians 5.5," *Scottish Journal of Theology* 26 (1973): 207。
- 50 πόρνος、εἰδωλολάτρης、μέθυσος は品詞が異なるが両方の悪徳表にある。πλεονέκτης はガラ5:20の ἐριθεία に、λοιδορος はガラ5:20の ἔχθρα と ἐρις に符合する。
- 51 V. C. Pfitzner, "Purified Community—Purified Sinner," *AusBR* 30 (1982): 46; South, " 'Curse/Death' ," 553-56。
- 52 B. Witherington, *Conflict and Community in Corinth* (Grand Rapids: Eerdmans, 1995) 158。
- 53 J. D. G. Dunn, *Romans 1-8* (Dallas: Word Books, 1988) 65, 343-44, 354。
- 54 人間の霊を示す場合を除いて（ロマ1:9; 8:16; 1コリ2:11; 7:34; 16:18; 2コリ2:13; 7:1,13; ガラ6:18; フィリ4:23; 1テサ5:23; フィレ25）、100回以上がこのケースである。

- 55 他の例としては1コリ5:3-4;12:10;14:12,14,15,32; ロマ12:11;2コリ4:13; フィリ1:27など。神の霊を示すのか、人間の霊を示すのか研究者によって意見は異なる。本小論では、Fee や Dunn と同様、見分けがつきにくいこれらのケースは神の霊と人間の霊の両方を意味していると考える。
- 56 J. A. Fitzmyer, *Romans* (New York: Doubleday, 1993) 490-91。
- 57 Dunn, *Romans* 1-8, 431。
- 58 Dunn, *Romans* 1-8, 454。
- 59 神の業への人間側の承諾は、「アッバ、父よ」と叫ぶことである。
- 60 J. D. G. Dunn, *Baptism in the Holy Spirit* (London: SCM Press, 1970) 124。
- 61 W. A. Meeks, *The First Urban Christians* (New Haven: Yale University Press, 1983) 150-57。無論、この叫びは洗礼時に限定されたものではなく礼拝中に神の子性を表現する際、発せられただろう (Käsemann, *Perspectives*, 130)。
- 62 G. D. Fee, *God's Empowering Presence* (Peabody, MA: Hendrickson, 1994) 24-26。
- 63 J. Murphy-O'Connor, *1 Corinthians* (Wilmington, DE: Michael Glazier, 1979) 42。
- 64 マルコ8:15; マタイ16:6,11-12; ルカ12:1; フィロン *Spec.* 1.293; 2.184; *Quae.* 1.15; *Congr.* 161; プルタルコス *Quaest. Rom.* 109など。
- 65 Hubbard は1コリ5:7-8と2コリ5:14-17が概念的に類似していると考察している (*New Creation in Paul's Letters and Thought* [Cambridge: Cambridge University Press, 2002] 186-87)。
- 66 Witherington, *Conflict and Community*, 159。
- 67 E. Käsemann は「破門は洗礼の出来事自体を無効にはできないし、洗礼において主のものとされた権利に何ら制限を与えることもできない。パウロがその霊について語ったとき、まさにそのことを意味しているのだ」と考察している (“Sentence of Holy Law in the New Testament,” in *New Testament Questions of Today* [London: SCM Press, 1969] 72)。
- 68 E. Schweizer, “πνεῦμα, πνευματικός,” in *TDNT* 6:435。